北九州市立文学館ニュース

文学の栞（しおり）

Kitakyushu Literature Museum News

第13号

2013年4月1日発行

抗（あらが）わない庶民に寄り添った林芙美子

―風も吹くなり　雲も光るなり―

館長　今川　英子

私はやっぱり庶民的な作家で終わりたいと思っています。（略）いつ死ぬかも分からないしね。だから無駄弾丸は抛りたくない。その点では非常に野心を持っているわけなんですよ。みんなに共感を持たれるような、そして庶民の人が読んでくれるような、灰々（はいはい）したものを書きたいと思っています。

一九五一年六月二四日、急逝する四日前のNHK放送での言葉です。四七歳でした。

林芙美子は一九〇三（明治三六）年生まれ、今年は生誕から一一〇年です。その人生は大正・昭和の激動の時代と重なります。

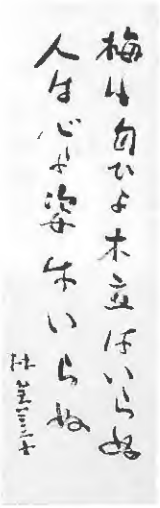
行商人の子どもに生まれ、二年遅れで高等女学校を卒業。恋人を追って上京しますが裏切られ、その年関東大震災に遭います。世界恐慌のあおりで定職にも就けず、職を転々とするなか、彼女を支えたのは書くことでした。「書いている時が、私の賑やかな時間であった。男に捨てられた事も忘れたし、金のない事も、飢えている事も忘れた」と。誰もが貧乏でした。失業者が街に溢れ、農村では娘たちが身売りされました。

思いがけなく『放浪記』がベストセラーになり、シベリア鉄道で欧州に向かいます。満州事変が起きたばかりなのにたった一人で。パリでは最先端の芸術に触れて帰国しますが、日本は日中戦争から太平洋戦争へと向かう暗い時代でした。たくさんの普通の人々が否応なく戦争に駆り出されました。「わたしは国民の目になる。耳にも鼻にもなってみせる。今のわたしは国民そのもの」と、芙美子も作家として従軍します。

そして敗戦。結果的に戦争に協力してしまったことへの呵責と自責の念に苛まれますが、「戦場の墓標と化した若い生命に対して、私はその人々の息を私の筆で吐き出したい」と、再びペンを執ります。

戦後の作品はそのどれもやりきれない哀しみに満ち、救いのない未来しか見えません。解決のない結末が放り出されるだけです。それでも読者は、この主人公は朝が来たらまた生きていくだろうと思います。闘うどころか声すらも挙げることをしないで、黙々と抗うことなく生きていく庶民に、芙美子は限りなく寄り添います。そして日本の高度成長を見ることなく突然逝きました。

「人生の分析を何度やってみたところで、私の心の底に根深くこびりついているものは虚無の思想である」と、晩年、ますます虚無感を深めていきました。荒涼と拡がる人生の荒野の向こうに芙美子は何を見ていたのでしょう。



［林芙美子 書］

目　次

抗わない庶民に寄り添った林芙美子 …… 1
第13回特別企画展　働き、書いた―北九州の職場雑誌展 …… 2
開会記念　松原新一さん講演「戦後」という時代の空気 …… 3
佐木隆三名誉館長講演会「門鉄文化」と「製鉄文化」
文学講座（全4回）「北九州の職場雑誌をめぐって」 …… 4
映画「この天の虹」上映会・鼎談
文学館開館6周年記念　葉室麟さんトークライブ …… 5
3.11から2年　いま、伝えたいこと―北九州市職員たちの復興支援―
全国文学館協議会「文学と天災地変」共同企画
第3回「あなたにあいたくて生まれてきた詩」コンクール …… 6
北九州市短歌・俳句大会 …… 7
文学館クラシックコンサート
明治大学人文科学研究所主催公開文化講座小倉
森鷗外その多面的なる耀き
文学館ロビー展
新資料紹介
文学館文庫紹介
開催案内　第14回特別企画展 …… 8
生誕110年　林芙美子展 ―風も吹くなり 雲も光るなり―
寄贈者・提供者、受贈雑誌一覧

北九州市制50周年記念　北九州市立文学館 第13回特別企画展

働き、書いた

――北九州の職場雑誌展

平成24年10月20日
～平成25年2月11日

近代以降、北九州地方は産業、流通の一大拠点として発展してきました。職場雑誌とは「北九州」という文化空間の一翼を担う、現場で働く人びとが生みだした文化の一つです。本展は職場で生まれた雑誌の展示を通じて、労働の現場から生まれた北九州の文芸文化を紹介しました。

◆構成

序　職場雑誌ことはじめ

職場雑誌には会社発行のもの、労働組合発行のもの、職場内の同人雑誌など、様々なものがあります。その一部、八幡製鐵所の「製鉄文化」や安川電機労働組合の「うたのなかま」などをご覧いただきました。また岩下俊作や佐木隆三が職場雑誌に書いた作品を紹介し、二人の著名作家と職場雑誌の関わりを紹介。

一　職場雑誌の黎明

北九州の職場雑誌の歴史は文献上、明治期まで遡れますが、原資料が確認できる最古のものは八幡製鐵所所内報の「くろがね」です。その他、八幡製鐵所職工同志会の「東洋タイムス」や「労働乃九州」など、戦前期の雑誌を紹介しました。

二　占領下の職場雑誌

太平洋戦争終結直後の職場雑誌の状況を、連合国軍総司令部（GHQ）による検閲とレッドパージという二つの視点から捉えました。検閲資料を収めたアメリカ・メリーランド大学プランゲ文庫所蔵の職場雑誌の書影をパネルで紹介し、その他岩下俊作らが刊行した「浪漫」や、門司鉄道局の「門鉄文化」など1945～50年に刊行された雑誌をご覧いただきました。

三　職場雑誌の隆盛

1950～60年代にかけて職場雑誌は隆盛期を迎えます。そこでは文化の自立が目指され、多くの「文化運動」が展開されました。その時期の雑誌で、記録作家の上野英信が編集し、筑豊の炭坑で働く人びとが作品を寄せた「地下戦線」や、旭硝子牧山工場から刊行された「文藝牧山」などを紹介しました。しかし60年後半以降には、経済の発展が生活にゆとりを生み、余暇の過ごし方が多様化、文学は数ある選択肢の一つとなり、職場の文学活動は徐々に下火になりました。

結　職場雑誌のいま

70年半ば以降、文芸系の職場雑誌は殆どその姿を消し、八幡製鐵所の「文化サークル」や北九州市役所の文芸懇話会「回転木馬」が見られるのみです。さらに今日は、社内報や広報誌など業務に関するもののみとなり、職場雑誌文芸はその姿を消しました。しかし働く自らが何者かという問いは今なお問われ続けています。文学が今日もそれに応えうることに期待し、本展の締めくくりとしました。

展示点数＝約150点

開会記念
松原新一さん講演
『戦後』という時代の空気
―一九五〇―六〇年代の職場雑誌の思想的位相について―
平成24年10月20日

開会を記念し、文芸評論家で久留米大学名誉教授の松原新一さんにご講演いただきました。

松原さんは、お父様が神戸市役所に勤められていたときに役所内の職場雑誌に寄稿されていたエピソードをまず紹介し、かつて「ものを書く」ことが一部の知識人の営みであったのに対し、戦後、表現の自由が一般の人びとまで拡大したことで、雑誌を作り発信しようという空気感が当時あったと説明されました。そして、八幡市役所発行の「あかい木馬」というガリ版刷りの雑誌に掲載された金井得治の「傷痕」という詩を紹介され、戦後の精神的荒廃状況を読まれました。物質的に貧しく、精神的にも厳しい終戦直後、日々の生活に追われ、ただ未来だけがあるという状況下で一人の若者が現実に向かい合う中で生まれた「手ごたえ」が、この詩にはあると松原さんは評されました。この「手ごたえ」は「門鉄文化」2号掲載の中島哀浪の短歌選評に出てくる言葉です。一人一人の作者が現実・生活と向き合ったときに感じる抵抗、そしてそれを読み手に伝えようとするところに生じるものを「手ごたえ」と中島は言います。松原さんは中島選の「愛情の足らぬを妻はいひしあと切藷を干し大豆をむく」などの短歌を紹介し、そのような「手ごたえ」が戦後の職場雑誌には強く表現されていることを指摘されました。翻って今日、生活と人との間の抵抗が減り、それに対して「とまどい」を覚えると松原さんは述べられ、そのような時代において「書く」こと、そして言葉はこれからどのようになっていくのかという問題を提起し、講演を終えられました。

戦後の職場雑誌について、当時の空気感や戦後の状況を踏まえて個々の作品の読みを示していただいたことで、そのあり様がより立体的に浮かび上がってくる講演となりました。

松原新一さん

佐木隆三
文学館名誉館長講演会
「門鉄文化」と「製鉄文化」
平成24年11月23日

佐木隆三北九州市立文学館名誉館長に北九州の職場雑誌、特に門司鉄道局発行の「門鉄文化」と八幡製鐵所親和会発行の「製鉄文化」について、ご講演いただきました。

佐木名誉館長はまずご自身が職業作家となった来歴についてお話されました。

八幡中央高校を卒業後、八幡製鉄所に入職され、同所勤務の作家、岩下俊作と出会われました。当時、岩下は製鐵所の若い人々と「創作研究会」というグループを作り、名誉館長もそこに加わり、「製鉄文化」などの職場雑誌に作品を書かれていました。その中で「製鉄文化」に投稿した小品「野いちご」が同人誌評に取り上げられたことなどで作家としての自信を深め、27歳で八幡製鐵所を離職し、職業作家への道を選ばれたことを説明されました。

また創作研究会には、第34回芥川賞候補となった佐村芳之や文芸評論家の星加輝光など門司鉄道管理局に勤める人びとも参加するなど、互いの交流が濃密であったことをお話されました。「門鉄文化」創刊号に掲載されている星加輝光の評論「姿勢」の一節を読み上げ、「星加さんらしい評論」と紹介され、往年の八幡製鐵と門鉄の文学的交流について偲ばれました。

そのような交流の中で、作家としての足場を築きあげ、現在のご自身があることを回顧するお話を通じて、当時の「門鉄文化」や「製鉄文化」をめぐる人びとが思い起こされる講演となりました。

佐木隆三文学館名誉館長

‡‡‡‡北九州の職場雑誌展　来館者の声‡‡‡‡

・「書く」こと「読む」ことへの熱い想いが伝わってきて圧倒されました。「労働」と「文化」の関係という問題提起にも触発されます。（30代・男性）

・壮観でした。展示も美しくて良かったです。一方でそれぞれのサークル誌間に存在したであろう差異について知ろうと思うと、展示という手段ではやはり難しいのかなとも感じた。（30代・女性）

・一昔前の父の世代の職場の雰囲気を知りたくて来館しました。働きながらペンをとるのは非常にエネルギーを必要とするでしょうが、展示されている様々な活字から当時の人々の熱気を感じることができました。（40代・男性）

・北九州で働く人々の文化の土台が、八幡製鉄と門鉄にあることがよく分かりました。60年代後半から70年代へ、そして現代へなぜ職場雑誌や文学活動が衰退していったのか、政治との関係でもっと掘り下げが欲しかったと思いました。（60代・男性）

文学講座（全4回）「北九州の職場雑誌をめぐって」

北九州の職場雑誌について8名の講師をお迎えし、文学講座を開催しました。研究者として、また職場雑誌に関わったそれぞれの立場からお話いただき、職場雑誌文化の一端を知ることのできる講座となりました。

第1回　11月10日
小林慎也さん
（梅光学院大学客員教授）
「北九州の戦後と職場雑誌」
山下敏克さん
（創作研究会「周炎」編集長）
「創作研究会の思い出」

第2回　11月17日
河野正彦さん
（詩誌「沙漠」代表）
「小倉市役所の職場雑誌「円座」とその周辺」
波佐間義之さん
（「九州文學」編集／発行責任者）
「3つの歯車」

第3回　12月1日
古谷龍太郎さん
（川柳くろがね吟社主幹）
「八幡の川柳」
折世凡樹さん
（八幡製鐵所広報部OB）
「美しい日本語」

第4回　12月8日
木下圭子さん
（北九州森鷗外記念会理事）
「北九州市職員文芸懇話会同人誌『回転木馬』の思い出」
深田俊祐さん
（元労働作家）
「虫の目で書く」

小林慎也さん

河野正彦さん

古谷龍太郎さん

木下圭子さん

山下敏克さん

波佐間義之さん

折世凡樹さん

深田俊祐さん

映画「この天の虹」上映会・鼎談

平成25年1月22日

関連イベントとして映画「この天の虹」（松竹配給　1958年公開　木下恵介監督／久我美子、川津祐介出演）の上映会を開催しました。

北九州の一角、当時の最先端を走っていた東洋一の製鐵所、八幡製鐵所。高度経済成長期の象徴ともいえる工場から立ち上る七色の煙に、日本の未来を思い描いた時代がありました。本作は木下恵介監督が、製鐵所という巨大な機構のなかで働き、ささやかに、誠実に生きる人びとの人生を描いた群像劇です。製鐵所内や当時の八幡の風景を収めた記録映画としての側面もあります。

上映会に先立ち、山下敏克さん（創作研究会「周炎」編集長）、菅和彦さん（新日鐵住金㈱八幡製鐵所開発企画室主査）、今川英子（聞き手・北九州市立文学館館長）による鼎談が行われました。

撮影当時、製鐵所に勤められていた山下さんは映画シナリオについての秘話を披露してくださいました。当時、安全係長だった作家の岩下俊作が、木下監督のシナリオを読み、川津祐介演じる須田が事故で即死する場面を変えるように要請。木下監督はそれに対して、作品の山場であり、変えられない、と拒否。最終的には久我美子が木下監督を説得し、事故に遭った須田が即死ではなく病院に運ばれるように修正することになったとのこと。お話から創作者同士の厳しいやりとりを垣間見ることができました。

八幡製鐵所の歴史資料に関する調査に携わられている菅さんは、当時の製鐵所の状況をお話しされ、また本作について、製鐵所の全面協力もあり、結果的にPR映画と捉えられたが、製鐵所はそもそも社をPRする必要性がなく、その意図はなかったと解説されました。

その他、工場から立ち上る「七色の煙」をめぐるお話など、映画をより面白く見ることのできる貴重なお話を聞かせてくださいました。

今川文学館長　山下敏克さん　菅和彦さん

映画のシーンに昔を懐かしむ来場者

‡‡‡‡ 来場者の声 ‡‡‡‡

・親子二代にわたる八幡製鉄所勤務のなかで、亡き父の生きていった時代の一部を見ることが出来、感慨深かった。製鉄所開催のイベントも懐かしい想いであった。撮影秘話は初めて知り、非常に有益であった。（60代・男性）

・夫の勧めで見て感激しました。製鉄所で働いた姿がダブり、八幡をより身近に感じ、良かったです。（60代・女性）

北九州市立文学館開館6周年記念

葉室麟さん トークライブ

平成24年10月12日

開館6周年を記念して、第146回直木賞を受賞された葉室麟さん（北九州市小倉北区出身、現在は久留米市在住）をお招きし、お話をうかがいました。（聞き手・北九州市立文学館館長今川英子）

作品について熱く語る葉室麟さん

◆直木賞受賞作『蜩ノ記』について

編集者から「武士の矜持と覚悟を見たい」と言われ書いた。人間は60歳くらいになると自分の残り時間をどう生きて行ったらいいのか考える。自分の生き方がきちんとできたらいいな、できる人間を書いてみたいということが発端だった。主人公の戸田秋谷は、若いころお会いした上野英信さんのイメージ。お訪ねした時、上野さんが土筆をとってくださり、土筆の卵とじをご馳走してくれたことが嬉しかった。尊敬する先達が、若い何でもない人にちゃんと対してくれたことに感動した。自分もこう生きたいと思った。『蜩ノ記』で直木賞をいただけたのは、幸せなことだった。

◆女の生き方を書く

日本の女性は基本的に「待つ女」。しかし、消極的、受動的かというとそうではない。待つという行為はリスクを伴うが、根底に相手への信頼や愛がある。「待つ」という積極的な行為をしているという意志が毅然としてある。例えば『無双の花』の闇千代は、自分のことは自分でやるんだという、覚悟とけじめがあって、そのうえで男と対等な関係を築く。共に戦う同志として相手の男と生きるという感覚をもった女性だ。そういった女性の生き方を書いている。

◆ぶれない生き方

ぶれないというのは、自分をもっているということ。現実の中で生きていると、周りの環境や社会情勢にふりまわされてしまう。『無双の花』の立花宗茂は苦しい浪人時代を経て、大名に返り咲くまで20年くらいかかっているが、生き方においてぶれなかった。

中央で勝者になった人ではなく、敗者と呼ばれるが地方で社会を支え切った人間が好きで、そうありたいなと思う。地方で小説をかいていくという意味のひとつはそこにある。

（講演録妙）

‡‡‡‡葉室麟さんトークライブ アンケート‡‡‡‡

・幅広いお話が聞けて楽しかった。歴史の話も興味深く、日本史を見直したくなりました。（30代・女性）

・自分を見失わない生き方を子どもたちにも伝えたいと思います。（60代・女性）

・作品に示されたぶれない生き方は大切だと思いました。人生の最期に、自分の人生は満足いくものだったと思える生き方をしたいものです。（60代・男性）

北九州市制50周年記念 全国文学館協議会「文学と天災地変」共同企画

3・11から2年 いま、伝えたいこと

―北九州市職員たちの復興支援―

平成25年3月1日～3月31日

2011年3月11日、東日本大震災発生。地震によって多くの命が奪われたあの日から2年が経ちました。文学館では全国文学館協議会共同企画「文学と天災地変」の一つとして、支援にあたった北九州市職員の言葉と写真の展覧会を開催しました。

あの日、テレビに映し出された被災地の様子は、今なお強く私たちの脳裏に刻み込まれています。地震によって崩れた家屋、全てを押し流す津波、制御不能に陥る原子力発電所。衝撃的な映像を目の当たりにし、自身の無力を感じていたことを思い出します。

震災発生後、北九州市はいち早く被災地救援を決定し、翌日3月12日には宮城県に消防航空隊を派遣。それから今日まで、522人の市職員が4県18市町の被災地に入り、支援にあたってきました。「鉄の絆」を背景に縁の深い釜石市にはデスクを設け、継続的に援助を続けています。

被災地支援の現場で市職員たちが、何をどのように思い、感じたのか。20名の生の声と被災地の写真42枚をパネルで紹介しました。また展示室内には復興支援に関する資料などの閲覧コーナーと、釜石市へのメッセージを寄せることができる「釜石への手紙」コーナーを設けました。これまでの救援、復興支援に関わった職員の言葉を通じて、この2年間の軌跡と、現在も続く復興に思いを寄せる展覧会となりました。

‡‡‡‡来館者の声‡‡‡‡

・報道では分からない点がたくさん見られて良かったです。支援の人の話など涙が出ました。（30代・女性）

・支援に行かれた方の生の声で、思わず涙が出ました。「忘れないでください」を心に決めて、息の長い支援をまず自分から行うことを実行したい。（70代・男性）

第3回「あなたにあいたくて生まれてきた詩」コンクール受賞作品が決まりました

北九州市立文学館では、北九州出身の詩人宗左近、みずかみかずよを顕彰するとともに、子供の豊かな表現力を伸ばすことを目的に、「あなたにあいたくて生まれてきた詩」コンクールを実施しています。今年で3回目になるコンクールには県内外から小学生の部に344作品、中学生の部には651作品の応募がありました。詩人の平出隆先生の最終審査により以下のとおり各受賞者が決定しました。

表彰式は、12月15日に文学館において開催され、岩手県滝沢東小学校から応募し受賞された畠山響さんも参加されました。

平出隆先生からは「新しい発見をめざしてください」とのお話がありました。表彰式のあと小倉少年少女合唱団の合唱が披露され、天使の歌声が文学館に響きました。

小倉少年少女合唱団

小学生の部

●宗左近賞
言葉と書く　大瀧　佳代　中島小学校6年

●みずかみかずよ賞
カナヘビのピュー　畠山　響　岩手県滝沢東小学校2年

●北九州市長賞
未来　中井　健心　柄杓田小学校6年

●北九州市教育長賞
真の力　万田　優希　高見小学校5年

●北九州市立文学館長賞
まるでレオ＝レオニのせかい　わかまつけんしん　牧山小学校2年

●佳作
はさみ虫とあそんだよ　上田　真子　中尾小学校2年
柄杓田のイカ　亀井　翔太　柄杓田小学校6年
かみさま　亀石　裕太　志井小学校1年
波　小松　桜都華　葛原小学校6年
ボール　島田　祐希　深町小学校5年
ぽぽ　首藤　涼介　牧山小学校4年
かっこいいぞ　たかはしそう太ろう　折尾西小学校2年
君とコーヒーゼリー　長井　遥　筒井小学校6年
つながっていく名前　原　日出行　松ヶ江北小学校2年
新しい、いのち　行たけ　かずま　牧山小学校2年

中学生の部

●宗左近賞
ふみかためたもの　常友　綾乃　大蔵中学校2年

●みずかみかずよ賞
紙飛行機　吉武　歩　大蔵中学校3年

●北九州市長賞
人って　山田　美空　大蔵中学校1年

●北九州市教育長賞
もう一人の家族　加來　美乃莉　小倉日新館中学校2年

●北九州市立文学館長賞
きらいだ　小宮　由梨奈　九州国際大学付属中学校1年

●佳作
魔法の卵焼き　梅木　彰大　明治学園中学校2年
My treasure　梅本　浩毅　九州国際大学付属中学校1年
あしたもがんばってみよう　後藤　紀穂　敬愛中学校1年
死が生を観る　渋谷　祐輝　大蔵中学校2年
空　成宮　有紀　小倉日新館中学校2年
心の花　西下　亜可里　九州国際大学付属中学校1年
アサガオ　野口　菜々美　大谷中学校1年
笑顔　麥生田　奈々　福岡教育大学附属小倉中学校1年
未来　森本　雅也　九州国際大学付属中学校2年
父が帰って来た　山口　楽々　九州国際大学付属中学校2年

表彰式での記念撮影

小学校の部 受賞者の皆さん

中学校の部 受賞者の皆さん

北九州市短歌・俳句大会

NHK学園生涯学習フェスティバル「北九州市短歌・俳句大会」が9月25日、26日の両日、北九州国際会議場で開催されました。

この大会は全国大会のほか全国7か所で開催されます。北九州市大会ではNHK学園の生徒を中心に短歌2411首、俳句5277句の事前応募があり、短歌大会に319名、俳句大会に470名の参加がありました。

当日は、午前中に選者による添削教室、午後からは、岡井隆さん、大串章さんの講演会と表彰式が開催されました。

大会参加者は選者による活発な意見交換や選評に熱心に耳を傾けていました。

俳句大会選評の様子

文学館クラシックコンサート

12月7日、日本フィルハーモニー交響楽団の弦楽四重奏団をお迎えして、クラシックコンサートを開催しました。

ハイドン「ひばり」、モーツァルト「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」、日本民謡「五木の子守歌」、井上陽水「少年時代」等多彩な曲が演奏され、来館者は館内に広がる美しいハーモニーを堪能しました。

日フィル演奏風景

明治大学人文科学研究所主催 公開文化講座小倉 森鷗外その多面的なる耀き

明治大学人文科学研究所は毎年各地で公開文化講座を開催しています。

今年は森鷗外生誕150年を記念し、ゆかりの土地のひとつである北九州市立文学館で11月24日に開催されました。

当日は、森鷗外研究の第一人者である東海大学小泉浩一郎名誉教授、都留文科大学田中実名誉教授、明治大学大石直紀教授、井戸田総一郎教授が様々な角度から森鷗外の魅力について語りました。

文学館ロビー展

第8回 櫓山荘子ども俳句大会入賞作品展

10月27日～12月24日

小中学生を対象とした第8回櫓山荘子ども俳句大会（同実行委員会主催）が行われ、表彰式が10月27日櫓山荘公園で開催されました。

今回、3852作品もの応募があり、その中から特別賞10作品、秀作36作品、佳作90作品が選ばれ入選作品は文学館で展示されました。

北九州市制50周年記念 川柳色紙・短冊展

1月4日～2月24日

北九州川柳作家連盟主催による川柳色紙・短冊展の入賞作品を展示しました。川柳色紙は挿絵が入ったものが数多くあり、華やかな展示となりました。

森鷗外生誕150周年記念 壁新聞及び読書感想文コンクール入賞作品展

3月13日～20日

壁新聞コンクール及び読書感想文コンクールの入賞作品を、展示しました。壁新聞には小学生が調べた森鷗外の小倉での暮らしぶりなどが紹介されていました。

森鷗外壁新聞、読書感想文の展示

◇新資料紹介◇

森鷗外より柴田董之（のぶゆき）宛はがき

一九〇五年三月二八日付

寄贈者柴田紀之さんの祖父にあたる董之氏に宛て、日露戦争従軍中の森鷗外が戦地から送ったはがきです。

董之氏の手紙を落掌したこと、当時、堺町にあった曹洞宗東禅寺の住職釈（片山）文器によろしく伝えてほしいこと、玉水俊虡（しゅんこ）和尚には別に手紙を送ったこと、などがつづられています。

釈文器も玉水俊虡も、鷗外が小倉滞在中に親しく交際した人物です。

董之氏は船場町に内科医院を開業しており、鷗外の送別会発起人にも名前が挙がっています。

鷗外が小倉を離れてのちも、温かな交流が持たれていたことを示す資料です。

文学館文庫第7集『森鷗外』刊行

森鷗外の小倉を舞台にした作品や日記を収録した文庫本『鶏・独身・二人の友・小倉日記』を刊行しました。文学館、ブックセンタークエスト小倉本店で販売しています。（一冊1000円）

北九州市制50周年記念　第14回北九州市立文学館特別企画展

生誕110年 林芙美子展

～風も吹くなり　雲も光るなり～

林芙美子生誕110年にあわせ展覧会を開催します。遺された原稿・草稿、書簡、遺愛品、雑誌・書籍、写真などでその生涯と作品を紹介しつつ、芙美子が生きた大正から昭和の激動期にかけての時代の記憶を新たにし、現代へのメッセージを浮かび上がらせます。

◆会　期

平成25年4月20日(土)～平成25年6月9日(日)

月曜日休館。4月29日、5月6日は開館、翌日休館。

◆観覧料

一　般　500円

中高生　200円

小学生　100円

◆内　容

第一部　林芙美子の軌跡

ふるさと

作家デビュー

扉を開ける

戦塵の下

怒濤のごとく

特集　林芙美子と旅

第二部　林芙美子のおもかげ

映画・舞台作品、絵画・書、ゆかりの品々、こだわりの家　ほか

◆文学館主催イベント

○開会記念対談

大泉淵（大泉黒石四女・林芙美子と共に暮した）×今川英子（文学館館長）

4月20日(土)　11時00分～12時00分

無料　場所＝北九州市立文学館

○文学講座

「林芙美子を読む」（全4回）

講師・今川英子（文学館館長）①4月20日（土）、②5月11日（土）、③5月18日（土）、④6月1日（土）　いずれも13時30分～15時00分　資料代等1000円（4回分）　場所＝北九州市立文学館　事前申込みが必要

○川本三郎さん（評論家）**講演会**

5月25日（土）13時30分～15時00分　無料　場所＝北九州芸術劇場小劇場（リバーウォーク北九州6F）　事前申込みが必要

○角田光代さん（作家）**トークライブ**

5月30日(木)18時30分～20時00分　無料　場所＝北九州芸術劇小劇場（リバーウォーク北九州6F）事前申込みが必要

◆関連イベント

○映画「BUNGO～ささやかな欲望～」上映　4月26日(金)

場所＝門司港ホテル

○太田治子さん（作家）**講演会**

5月12日(日)　場所＝北九州芸術劇場小劇場（リバーウォーク北九州6F）

○劇団青春座公演「もう一つの放浪記」～花のいのちはみじかくて～

5月18日(土)、5月19日(日)　場所＝北九州芸術劇場中劇場（リバーウォーク北九州6F）

○企画展協賛映画祭　北九州文学散歩～林芙美子と郷土作家たち～　5月18日(土)～6月7日(金)　場所＝小倉昭和館①号館

詳しくは、文学館ホームページか展覧会チラシをご覧ください。

寄贈者・提供者

青森近代文学館　赤星千鶴子　阿木津英　秋吉久紀夫　天川悦子　「ありがとう折尾駅舎」実行委員会　安間隆次　市川手児奈文学賞実行委員会　伊藤幸雄　今村修　後銀作　打出宏美　岡田功　岡本瑤子　岡山デジタルミュージアム　小袋郁子　かごしま近代文学館　柏木恵美子　柏木隆之助　神奈川近代文学館　金澤湯涌夢二館　鎌倉文学館　木口幸子　北九州市立美術館分館　北九州俳句協会　北九州文学協会　北九州文化連盟　久我秀茂　倉本美代子　群馬県立土屋文明記念文学館　現代短歌社　興膳克彦　香美市立吉井勇記念館　こおりやま文學の森資料館　小倉南看護専門学校　小林慎也　さいたま文学館　笹井水輪　佐々木基一全集刊行会　指方恭一郎　佐野裕子　産経新聞社　重本恵津子　柴田紀之　JKA　全国文学館協議会事務局　仙台文学館　宗香　鷹取美保子　田中裕之　津田榮子　坪内稔典　徳島県立文学書道館　轟良子　中尾實信　中原澄子　中村真生子　新田千津子　日本近代文学館　日本現代詩歌文学館　野田昌明　波佐間義之　波田淳子　光澤史子　秀明大学　姫路文学館　ふくやま文学館　Beate Wonde　北海道立文学館　増田連　町田市民文学館ことばらんど　松ヶ江郷土史会　松本洋一　水摩清子　椋鳩十文学記念館　森英一　森鴎外記念館　柳生じゅん子　柳川文芸クラブ　山口公和　山下敏克　行橋市歴史資料館　㈱ロイヤルホテル

受贈雑誌一覧

青嶺　赤とんぼ通信　馬酔木　あしへい　穴生文芸　avanti　色鳥　海沖　海峡派　九州俳句　九州文學　九大日文　群炎　月刊俳句界　月刊みんぱく　玄海　左岸　砂漠　七曜　自鳴鐘　周炎　人権の文化　船団　川柳あやめ　川柳くろがね　小さい旗　天山牧歌　伝書鳩　天籟通信　とびうお　菜殻火　虹野　白桃　橋　ひろば北九州　ぺだる　耳空　八雁　與謝野晶子研究　四人

北九州市立文学館
Kitakyushu Literature Museum

2013年4月1日 発行

北九州市立文学館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内4-1
TEL 093-571-1505
http://www.kitakyushucity-bungakukan.jp/

■開館時間
火～金　9:30～19:00（入館は18:30まで）
土・日・祝　9:30～18:00（入館は17:30まで）

■休館日
毎週月曜日（月曜日が休日の場合は翌日）
年末年始

■JR小倉駅より徒歩15分　■JR西小倉駅より徒歩10分
■勝山公園バス停より徒歩1分　■北九州市役所前バス停より徒歩2分
■小倉北区役所前バス停より徒歩2分
■北九州都市高速大手町ランプより2分
■駐車場は文学館最寄りの各有料駐車場をご利用下さい

1208061A